

孟蘭盆

いつまでも世にあるべきやとのたまひし父の齡よはひになりて孟蘭盆

丹仙

大空の絹ひとひらも動かさず父は逝きけり初夏の日に

茉莉花

夜の明けを太空蓮のひらききり散りゆくばかりのいのちにしあり

れん

おほきみのへにこそ死なめかへりみることのみおほきひと一生なりけむ

かわせみ

おほきみの少年兵たりしが兄はいま死して尊き八十四年

真奈

戦死した息子の遺影に懺悔する祖母はお国のために死ねと言ったと

雛菊

悔いること何くれとなく人の世は然して誠は世を導けり

蘇生

天と地もゆきかふ歳も旅人と一人黙して歩む八月

丹仙

野辺行けば川原撫子咲にけり宮城野萩の咲く傍らに

弁慶

かたはらにも言はぬ母いつの世も女は耐ゆるしかあれど生く

れん

有夫の婦首切りあらば真つ先に少子化対策今さら可笑し

真奈

この国の戦略なきは業なるや悪しき術なる少子対策

蘇生

地に足をつけたフツの母たちに学べ小賢しき為政者どもよ

茉莉花

女子二十五歳定年制に抗議して裁判起こせし〇〇もめて

真奈

同級生幾歳ぶりの再会の言葉はそろそろ産んでみないか

ぼぼな

産む性を持って生まれしわれらおみな月に投げ上ぐ言葉持とつよ

茉莉花

人はみな翼の跡を背にもち海と大地は女性名詞よ

真奈

アマテラス大神以来この国は女性無くんば夜も明けぬ国

弁慶

八月の日の出は日々に南して磯の潮にも秋は見えたり

蘇生

没日見る弁天池の八月尽名残りの蓮の色のほのかに

真奈

去りてゆく夏の姿は日のなごり惜しむ名家の執事なりけり

丹仙

マイホーム追われし星よ地に降りよ水金火木土はた天海より

茉莉花

冥王はなんたる不明と冥界へままよ地球もいま幽明境

真奈

ありとしもなき星なれど冥王星とはにその名の消ゆるなかれとく

かわせみ

わがありしことなどいづれ消えゆかむ塵ひとつだに更にあらなく

れん

遙かなる所より来ていつかまた遙かに帰る心地して人皆などてかくも懐かし

丹仙

計らずもされど不思議な縁えて森羅の友の日々に嬉しき

蘇生

はからづもかの病院のDr.なり見えざる縁いのりにもにて

れん

吾亦紅ちぢみて垂るるばつねんとサヨナラ言へぬいくちなしにて

ギオ

サ・ビ・シ・イと片仮名で書き星合の夜はおどけて手を伸べてみる

真奈

手をのべる手をひくこともままならぬきめに恋する男なりせば

蘇生

誰が招きし秋霖なるかそぼちゆく今昔男の恋むなしくて

ギオ

互いあい炎のたびに思ほゆる君がひとみのブルーサファイヤ

眞

ブルーサファイアの瞳もいつか濁りゆき霞む花野の老いのはなやぎ

かわせみ

わが身とて思ふに動かさず心のみあくがれいつるを老いとや言はむ

ギオ

わかこころむかしのそののはだいろをはじめてたらすわくわくするとき

眞

堂々と雷門の雑踏にライندگانスの長き開脚

蘇生

毎年よ秋の彼岸の行別れまたあふ日まで Long Goodbye!

ギオ

黙の刻朱に染まりぬ彼岸花つたの袂れのかなしさに耐へ

真奈

きこえしはひがばなかなちのいとあかがふるえてかたるいにしえ

眞

お彼岸に花の首裁ちささげなば墓の底にて血を吸ふ罽體

深海鮫鰐

一途なる情念にも似て彼岸花あれは花のみ愛せし頃か

ギオ

彼岸花造形的に面白しおてんば娘の髪型に似て

雛菊

曼珠沙華義母に継母におかあちゃんみんなみんなが彼岸にならぶ

寂

鮮やかな紅は母なり曼珠沙華白きは終の父の白髪

蘇生

曼珠沙華黄泉比良坂下り道今も目にあり青き海原

弁慶

半開のドアの向こうに今もある昔の、みたいな秋の淋しさ

ギオ

どの秋も実りのあとは空ろなり来し方蓋しこの秋ほどは

蘇生

秋の灯に弛びし絃のアヴェマリアしみとほりゆく夜の優しく

真奈

ねえ、あなたと呼ばれる心地に見返れば金木犀の噺せ来る夜ぞ

ギオ

最果ての地に冥王の星生れて静寂しじまのうちに積る木犀

丹仙

君知るや樹齡重ねて千二百年三島大社に木犀薫る

弁慶

おみくじを金木犀に結びたる健やかなれと希ひたりし日

れん

まげきはのニニろがさまにみちみちてとぶすべごとくディープいとほし 眞

ひたむきに走るがいのち敗れしもその眼かなしきディープインパクト

真奈

ぬばたまの夢魔が翔けるか白き馬 星ふる枯れ野に露は晶晶

深海鮫鯨

花水川岸に広がる唐土の原に咲きたる大和撫子

弁慶

仲秋の宵に雨音聞きたれば月の涙と思いけるかな

雛菊

泣きあかし 涙からさば すがすがし 朝あたらしく 枯れ葉はセピア

路

地に満つる悲しび夜ごしの大雨を涙とせしや今朝の秋晴れ

ギオ

よつやくに午後の日溜り戻り来て雲間に白き宵の十六夜

蘇生

風吹いて雲はらはれて十六夜関東平野を照らす満月

雛菊

ふるさとの家はすどおり戻りきて月かつかうと十六夜の宙

れん

端正の月載せるたる大櫓隈なきこころ述志歌へと

真奈

十六夜の月昇りけり新宿の小滝橋通り真南の空

弁慶

立待の月に響かふ筆策に女神もなびくや東儀の君よ

ギオ

色の香に陰がさしゆく十六夜 天に月あり窓辺に孤影

深海鮫鯨

沈香や天をもぬけて立ちのぼるお御堂ふかくに仄灯りする

れん

のびらかに秋空に並む雲見上ぐ胸騒ぎせし頃なつかしく

ギオ

浮雲に茜の橋のかかる宵飛んでみるかと一陣の風

真奈

うつとりとみとれるばかり 先きの月かかる円にぞ恋ねがうべし 眞

眞

昼の月波静かなる浜名湖の姫街道の紅葉微かに

弁慶

海原に遠き島影凜として闌けりて秋は澄み渡りけり

蘇生

薄曇り陽ざしゆるゆる神無月アメージングはも澄みてしみくる

れん

菊の秋 香りに酔って いたずらに 薄め買っわれ 八重の花びら 眞

ガーベラと菊の区別つかぬ眼に街ゆく秋の娘らも花 深海鮫鯨

菊秋の北のドームが打ち揺れてテレビの前のわれも道産子 蘇生

ある年の秋の揺れの甦りくる富士に白雪むねのくるしさ れん

秋冴えて人に飽きたるひとり身の見上ぐる空に富士の白雪 深海鮫鯨

国道を走るアクセル緩めては富士の白雪友の横顔 文枝

駿河路をひたはしりたる一日なり小夜のなかやま夕月に逢う 寂

古へは衣干すてふ松が枝にただ潮の香は三保に変わらじ 深海鮫鯨

南んなみに石花海せしうのみを見て西に月小夜の中山夕暮れの頃 弁慶

小夜子さん去年の暮れにぞゆきたりし個展案内に詩がいつもあり れん

還曆に習い初めし友垣の個展を騒ぐ芸術の秋 蘇生

曳かれゆく犬を羨む秋もあり美術の森に絵を出る美人 深海鮫鯨

秋の日や枕草子に書かれたる事任ことせきの社の森静かなり 弁慶

Good-bye my love! 忘れはしない君の名を幸くあれと秋のふた道 ギオ

ひたすらに生き来し道はなになるか履歴は重くいのちある器 れん

知りそむる風のいたみと空の黙とべら實ひとつ朱くはしけり

真奈

一世紀遅しく生き千の風今懐かしき豪傑笑ひ

文枝

いくさなき世に豪傑となりぬれば酒魔を降して酒一千鍾

深海鮫鯨

鏡割り差配は柄杓に胴間声香りめでたき榊酒を酌み

真奈

虫歯多きわれにしあれど沁み通る新酒の味の豊かなるかな

弁慶

虫歯ある身の華やぎを過ぎていま夜毎わが身の入れ歯を洗らう

蘇生

木枯しの吹き荒るる朝身のうちに虚あるごとき淋しき目覚め

ギオ

おぼろげてねばけたあさはなほさらこいとほしかりしいのちのさまや

しん

いくたびも死したきおもひなにゆえに臆となりし記憶いまさら

れん

歳ふれば死なむと思ふ恋もなし秋に偷まむ風やむ紅葉

深海鮫鯨

登り来て峠の紅葉今盛り彼方に高き夕焼けの富士

弁慶

桃李和歌連作百首歌集

第七五〇一首より七六〇〇首迄

平成一八年八月一九日より平成一八年十一月二三日迄